

木
槿

石
上
静
子

幼い頃

祖母の家の生垣に咲いていた

白い木槿の花

暮れがての蝉時雨の庭 木陰の行水

長い髪を巻き上げ 湯浴する祖母の肌は白く

マシユマロのように柔かだった

うす紙の透きとおるような

白い木槿の花と重なり

まだ若い祖母が記憶の中で生きている



—— どうして朝咲いたお花は夕方しぼむの
—— 人もお花も同じよ と言った祖母

理解する術もなく 唯

呪文のように心に深く刻まれたまま

戦争も終りに近ずいた

昭和二十年三月

東京はB 29の容赦ない空爆で焼き尽くされた
祖母の命まで 奪い去って行った

疎開先で知る悲報

—— おばあちゃんが死んでしまった

最愛の祖母を失った

私 十歳の悲しみ

あの 生垣の白い木槿の花の儚さ

祖母が自からの命と重ねた

言葉だったのだ——

今 蘇る祖母の家

台所からことごと包丁の音

味噌汁の匂い

納豆売りの声 豆腐屋のラッパの音が……

今年も私の家の庭にも

白い木槿の花が咲いている